



日本のSF  
(短篇集)  
現代篇





# 日本のSF (短篇集)

## 現代篇

石川喬司 福島正実編



早川書房

## 世界SF全集 35

---

日本のSF（短篇集）現代篇

石川喬司 福島正実編

〈検印廃止〉

---

1975年6月20日再版印刷 1975年6月30日再版発行

発行者 早川 清 東京都千代田区神田多町2〜2

発行所 株式会社早川書房 東京都千代田区神田多町2〜2

電話 東京(254) 1551〜8 振替 東京 47799

印刷所・株式会社享有堂印刷所 製本所・株式会社明光社

本文用紙・本州製紙株式会社

表紙クロス・日本クロス工業株式会社

函紙・富士加工製紙株式会社

製函所・株式会社佐藤製函所

定価 1600円

---

〈乱丁本・落丁本は本社にてお取り替えいたします〉

日本のSF

(短篇集)

現代篇

編者

福 石  
島 川  
正 喬  
実 司



# 目 次

## 第一部 限りなき空間

宇宙救助隊二一八〇年……………光瀬 龍 11

宇宙塵……………高橋 泰邦 25

ハイウェイ惑星……………石原 藤夫 36

耳鳴山由来……………矢野 徹 67

神への長い道……………小松 左京 82

## 第二部 来たるべき明日

白い服の男……………星 新一 141

万国博がやってくる……………眉村 卓 154

ベトナム観光公社……………筒井 康隆 174

世代革命……………生島治郎 194

二十一世紀の教養……………谷川俊太郎 213

機関車、草原に……………河野典生 218

イメージ冷凍業……………都筑道夫 238

贅 沢……………北 杜夫 251

意地悪爺さん……………北 杜夫 257

### 第三部 人間を越えて

落陽二二一七年……………光 瀬 龍 265

傍のあいっ……………手塚治虫 283

合成美女……………倉橋由美子 288

砂上の影……………久野四郎 307

ブルドッグ……………筒井康隆 319

## 第四部 地球を侵すもの

収獲……………半村 良 329

悪夢のかたち……………平井和正 367

紙か髪か……………小松左京 394

## 第五部 時間と次元への旅

影が重なる時……………小松左京 413

ちがう……………福島正実 432

魔法つかいの夏……………石川喬司 463

パチャカマに落ちる陽……………豊田有恒 485

## 第六部 イマジネーション・その他の世界

|           |       |     |
|-----------|-------|-----|
| 人脳培養事件    | 佐野 洋  | 515 |
| 待っている女    | 山川 方夫 | 527 |
| 鍵         | 星 新一  | 534 |
| 逢いびき      | 石川 喬司 | 540 |
| 過去への電話    | 福島 正実 | 544 |
| 夜に別れを告げる夜 | 樹下 太郎 | 558 |
| X電車で行こう   | 山野 浩一 | 562 |
| 空地        | 北 杜夫  | 589 |
| 人魚伝       | 安部 公房 | 597 |
| 解説        | 福島 正実 | 633 |



# 第一部

## 限りなき空間



## 宇宙救助隊二一八〇年

光瀬 龍

記念碑といえ、たいていは明るくひろろとした広場の中央にあって、緑の芝生や色とりどりの花壇に囲まれ、子供たちやたくさんの鳩によって顕影されているものだが……

これは違う。この巨大な褐鉄鉱の原鉱をたち割ってつくられた高さ三メートル、横十メートルの長方形の記念碑は、砂嵐のあとの血のような夕焼けの中では奇妙に古びて赤さび色に染まり、また青藍色の冷たく乾いた夜の中に沈んで荒れ果てた廢墟のように見えた。

ここ、火星をおとずれ、あるいはここを経由してさらに外周の惑星への旅を続けてゆく人たちも、その想い出のために一度は、この東キャナル市を見おろす丘陵の中腹にある記念碑の前に立った。そして申し合わせたように皆、い

ささかのおそれを面に浮べるのだった。

それは誰しも、自分だけはこれらの人のやっかいにはなりたくないものだ、という本能的な感情にもとづくものであった。

《宇宙救助隊記念碑》表にはただそれだけ。裏には《建立二二〇八》とのみあった。なんの碑誌ひとつ記されてもいず、また、レリーフひとつ彫りこまれてもいなかった。ありきたりの名譽や賞讃は彼らにとつてふさわしくなかったし、その凛々しい姿を彫りこもうという当初の計画も、誰かの意見で沙汰やみになってしまった。結局、巨大な褐鉄鉱の粗面は、多年、細塵に磨かれて、今は鏡のように太陽の光を反射し、夜は幾千の星々を映した。

惑星間航路が開設以来、《宇宙救助隊》によって、どれだけ多くの宇宙船があらゆる難破をまぬかれ、あるいは不運にも遭難した宇宙船から人命が救出されてきたかは、ここに説明するまでもない。それはすべての人々が知っている。その輝かしい功績は人々の口から口へと伝えられ、古い話はすでに伝説化されている。そして若い娘たちや、勇気になりたいいきいきとした感動を失わない少年たちの胸に、変らぬかぎりないあこがれを抱かせるのだった。

だが、どの都市の、どの植民地の人々も、偉大な功績を

あげつつある宇宙救助隊員の姿を見た者はいなかった。なぜなら、《宇宙救助隊》は人跡未踏の冷たく暗い荒涼たる空間がその活躍舞台だからなのである。

これはその《宇宙救助隊》の数多いエピソードの一つである。

\*

地球政府惑星開発局所属貨物船ブルー・リンクス号は、外周定期二十一便の航程の最後の部分に入ろうとしていた。木星の衛星ガニメデにある木星開発基地の一つ、J七は進入コースへの誘導を開始していた。自動操縦装置はその電波を正確にキャッチし、速度通信機からの『点火』のサインを今か今かと待っていた。四十秒後には、慣性航路を脱するための最初の噴射がはじまるはずであった。

噴射は四個の熱核エンジンのうち、二個を使って四秒間おこなわれ、つぎの二秒間に全力運転、そしてさらに二十秒間の六十％推進によって、ブルー・リンクス号は木星大気の表層に到達できるのであった。

ブルー・リンクス号は開発局標準型船で、雑貨を中心としたコンテナ貨物船であり、別に四十人分の座席も設備されていた。アライド・バッジ方式熱交換機をボッドに

収めて胴体側面にぶら下げた形は、この頃ではいささか旧式に類するが、定期航路につきかう場合、その経済性はなかなか見棄てたものではなかった。二十一便、つまり、ルナ・ベースを発し、火星の東キャナル市ポートからS十七人工惑星を経由して木星のJ四基地にいたるコースを、ブルー・リンクス号はこれまで、一回の事故にぶつかることもなく運航回数をかさねてきたのであった。

木星に散在する十一の開発基地に送りこまれるたくさんの貨物と、四十名の技術者たちを、その満船重量ぎりぎりにまで呑みこんだブルー・リンクス号は、今や木星をへだたる九百キロの空間を弾丸のように突進しつつあった。

船長フォーリー・ルカスは、メーター・パネルにはめこまれたスクリーンにちらりと目を走らせた。そこには衛星ガニメデの赤褐色の巨大な半球形が、スクリーンのほとんど三分の二を占めていた。そのどこかにJ七基地があるはずであった。サイン・ボードの赤灯が緑に変わった。ルカスは機関室への高声機に向かってどなった。

「点火！」

最初の不幸はこのときにやってきた。

ブルー・リンクス号の巨体は身震いするように震動した。

その一撃は後部から前部へむかってかけぬけていった。

ルカスはしばらく身動きもしないで、その通り過ぎてゆく震動に耳をかたむけた。遠くの方で冷却器のエア・コンプレッサーがリズムカルに鳴っているだけで、なんの物音も聞えてこなかった。

ルカスは直感的に、なにごとか重大な事故が発生したことをさとした。

「第一航宙士、船長室へ、第二航宙士は操縦系統の点検、機関長は船長に連絡をとれ。聞えるか？ 第一航宙士、至急船長室へ、第二航宙士は……」

「船長！ 第三、第四ノズルが破壊しました。本船は所定のコースをはずれてすべっています」

「ノズルが！ 君は第三航宙士のシマだな。機関室に連絡をとって破損の状況を調査してくれ。それから全般的な被害を報告させろ」

「了解、船長」

それきり再び深い静寂がやってきた。あいかわらず遠くの方でエア・コンプレッサーのリズムカルな音が響いているだけだった。

ルカスはいたたまれない焦燥の中で、ヘルメットのジッパーを閉じた。緊急事態に必要な装具のすべてを身につけ、

なお、じっと耳をすます。船長である自分が、この室を動くことができないのがたまらなくもどかしかった。

ほうぼうから狂ったように電話が入りはじめたのは、それから五分もたつてからだった。

事故のりんかくはようやくはつきりしてきた。フライド・パッジ方式二次交換器のパイプのうちの一本が脆性破壊を生じ、おそろしい熱がいったん第三、第四噴射機構に流れたらしい。キャパシテイをはるかにオーバーした噴射機構はその自動制御能力を失って、自らを噴きとばしたらしい。報告を受けるルカスのひたいは冷たい汗に濡れた。

これでブルー・リンクス号は、直進することがまったくできなくなってしまった。残った第一、第二のロケットを発火させれば、ブルー・リンクス号は大きな円を描いて空間を永遠に飛び続けるだけだ。

幸いなことに搭載している貨物と、四十名の乗客に被害はなかった。だが、第一航宙士と第二航宙士、それと機関長、第三、第四噴射機構を担当していた七名の機関部員はその命を失った。彼らの勤務位置は事故発生場所にあまりにも近すぎたのだった。

地球標準時十八時二十七分を二秒過ぎたとき、外部ブロック中央無電局の緊急警報器のブザーが金切り声をあげた。一瞬、あらゆる受信は自動的に閉鎖されて、その緊急通信の告げる内容を他へ流すべく待機した。猛烈な雑音が入りはじめた。

「……コチラ、定期二十一便、ブルー・リンクス、救助ヲ乞ウ。救助ヲ乞ウ。本船ノ現在位置、B座標Xイコール二〇八・九七一〇Yイコール九八・三〇一八Zイコール七七一・〇〇八二。J四への進入慣性コース上ニ於テ熱交換器ノ事故発生。第三、第四ノズル爆発。本船ハコースヲ失ッテ漂流中。船内ニ放射能の漏洩アリ。至急救助ヲ乞ウ。コチラ、ブルー・リンクス、コチラ、ブルー・リンクス、救助ヲ乞ウ」

その座標近傍のすべての宇宙船はチェックされた。しかしそのどれもが小型の雑用船であり、ブルー・リンクス号に接近してそれを救助できる設備をもったものはいなかった。

木星のJ四、J七、J十一の各基地の司令は、その所属する工作船にブルー・リンクス号の救出を命じた。たしかに工作船のもつ能力は充分にその任務を果すであろうと思

われた。卵形、ハイ・チタンステンレスの銀色の工作船は、イオンロケットの白熱の焰を曳いて基地を離れた。

ブルー・リンクス号の指示する座標点を追って、三隻の工作船は流星のように暗黒の空間をおちていった。衛星オイローバがゆっくりとその位置を変えていった。

やがてリーダーにブルー・リンクス号が光のしみとなって映りはじめた。

三隻の工作船は獲物を追う猟犬のように、大きく散開して接近していった。

リーダー同調航行路選択装置は、工作船をびたりとブルー・リンクス号に平行させた。舷間距離二十メートル。まるでボルトで固定したかのようにその位置を変えなかった。二隻が左右から、一隻はまうえから、傷ついた仲間をかばうように被いつつみこんでいった。

サーチライトが輝き工作船のハッチが開かれ、作業員がいなごのように飛び出す。背中の携帯ロケットを噴かしながらブルー・リンクス号にとりついてゆく。見るまに、十数本のワイヤーが三隻の工作船とブルー・リンクス号の間に張られた。一時間後に、左の側面に平行する工作船からケーブルカーのレールがのび、ブルー・リンクス号の船腹に開いたハッチに熔接された。たくさんのパケットがむか